中國兵亂記一

著者　中島昌行

將軍義植公所々御合戰并御上洛の事

于レ茲人皇百五代帝後柏原院御宇、從二足利尊氏公一十代後胤、征夷大將軍權大納言從三位源*義植公爲二武將一。然るに明應二年武臣細川武藏守政元・畠山彈正忠義豐企二逆心一、天下大に亂れて將軍義植公於二所々一被レ遂二御合戰一、河內國正覺寺の御合戰に討負給ひ、西國へ御下向故天下成二無主代一。此時諸國に兵亂起て國主郡主其爭無二止時一。義植公周防國へ御下向、大內權助義興御賴暫御在國被レ成候。此時中國西國の武士悉く隨順仕り、逆心之輩楯二籠城々一御追討仕り給ふ。將軍御武威廣大也。此折節細川武藏守政元被レ害二家僕一、天下興亡有二此時一。義植公大內權助を御賴此節遂二上洛一、達二本意一、度由被二仰出一、山陽道西海道の國主へ有二御回文一。不レ移二時日一、馳來る國々の軍勢十二萬三千餘。永正五年正月二十日、周防國吉敷郷より出二兵船七千餘艘一、義植公御上洛。京都義澄朝臣へ致二注進一事如レ引二櫛齒一。義澄卿權職細川右京大夫澄元・三好筑前入道長元兩大將に被レ添二三萬餘騎一、爲二防戰一、攝津國兵庫西の宮・尼崎・難波邊出張、大內權助義興は能島・來島・因島を海上爲二先陣一、二月二日兵庫西の宮・尼崎海上に二行作二船筏一、楯突並べ相戰ふ。細川三好の軍勢一戰に懸負け、防戰不二相叶一、旨義澄朝臣へ遂二注進一ば、京都へ引上げ構二要害一、可二相戰一と有二軍使一、京都にても防戰不二相叶一、丹波國へ落下り給ふ。義植公は、西國攝津所々御合戰に被レ得二御勝利一、六月八日御上洛。則再任二征夷大將軍一、治世靜謐也。大內權助義興依二軍功莫大一、被レ任二左京大夫從三位一、被レ居二管領職一、歌二天下賀祥一、唱二國民萬歲安樂一。

義植公中國御政道并二階堂政行備中在國の事

*義植は義稙の誤なり。

永正六年六月源義植卿被レ召ニ天下國主一、年來之被レ揚軍忠一被レ行ニ忠賞一累年軍勞被レ致ニ休息一、向後者國之に被ニ居置一、探題國主之仕置、地頭の行跡可レ被レ達ニ上聞一と有ニ評定一。其節備中國は雲州の鹽治尼子の旗下も有り、四國細川三好の幕下も有り、播州赤松旗下も有る故に國亂す。御近侍二階堂大藏少輔政行●上野民部大輔●伊勢左京亮備中へ被ニ指越一、國侍を御身方に引入候樣にとの上意にて、上野民部大輔は下道郡下原郷鬼邑山に在城、伊勢左京亮貞信は小田郡江原村高越山に在城、二階堂大藏少輔政行は淺口郡片島に在城、近郷地頭爲ニ冠職一在城、國中に立ニ制札一禁ニ貪民財一而扶ニ助貧者一愛ニ憐孤獨一。是故に國民親附する事如ニ父母一。義植公御治世の內、山陽道順見廻國の節、二階堂政行己を正し政道爲ニ明白一之由、達ニ高聽一御感悅不レ少。依ニ誌意一同國窪屋郡高山城主石川左衞門尉久次上房郡松山城主高橋備中守と緣結し、國中平均故備中國探題に可レ被レ居仁也。殊に先祖は藤原氏祖大中臣內大臣大織冠鎌足十代の後胤、二階堂元祖遠江權守爲憲より八代、山城守行政より五代、名家の勇士と被レ出レ撰備中賀陽郡刑部郷經山へ取替被ニ仰付一、嫡男孫七郎を御近士に被ニ召出一、被レ任ニ從五位下近江守一候節、播州赤松上野前司軍勢備中へ相働、遂ニ防戰一得ニ勝利一候節、被ニ抽忠心一無ニ比類一由御感悅の趣、將軍義植公より二階堂近江守に御感狀を被レ下。親二階堂政行は被レ侵ニ重病一、大永五乙酉暦二月十六日に卒去。廟所在ニ井山寶福寺一、報恩院德岩良雄大居士。佛事を懇に問ふ。

*問は弔ふの意

大內義興管領職御宥免并備中國御仕置の事

大內左京大夫義興は、十二年管領職相勤むる內、私領の以ニ財寶一天下の諸民を扶持する故、領內の諸民及ニ飢渴一。依レ之權職蒙ニ宥免一周防に在國、自今管領職細川左京大夫澄元●同武藏守高國に被ニ定置一處に、家督論一家の遺恨無ニ止事一、天下の有ニ權職一公儀を輕んじ、諸國に起ニ大亂一、廢ニ仁義道一忠臣之志無ニ一點一、或諍ニ一家之所領一、立ろに別れて射ニ不義弓一放ニ不仁矢一諸國無レ所レ不レ亂。賞罰猥に行ひ給ふ故也。凡そ天下の治は有ニ人心之正一。人心之正者有ニ冠職之正一也。速に可レ被レ遂ニ政道之要一有ニ議定一。時に將軍義植公仰には、仁義之道不レ用、惡世之政道不レ任ニ思慮一、大

永元年三月有レ退二出京師一。淡路邊鄙に成二茅茨之居住一。給ふ不定の浮世也。義植公京都退出の後、天下無主の世と成る。依レ之請二源義晴朝臣一備二武將一有二將軍御宣下一。此時國々諸候有二上京一。國政の諸式等有二告報一。得レ暇令二在國一畢。二階堂近江守居城へ赤松方の軍勢相働く時もあり、尼子方出陣遂二防戰一時もあり、細川下野守・三好筑前守軍兵渡海の時もあり。國中の郡主度々有二變心一。二階堂氏無二二心一順二敬公方一、大内家隨二幕下一、每々任二廻文一諸國へ遂二出陣一。抽二軍忠一故、將軍義晴公より二階堂氏行へ掟意に、備中に諸方境目なれば國民邪智盛にして、下民も長々脇指をはいて拳を握る事常々也。不道非法にして不忠不孝の者あり。近江守令二在國一郡主郷司土民に至る迄平治の事常々心懸、正道正理忠孝不レ埋樣に賞罰明に國を治め、仁義を專にして國民をなづけ候樣にと被二仰付一。上仁義を行ふ時國家亂るゝ事なし。

尼子晴久より三吉備後を攻事幷中國侍大將三吉へ加勢の事

天文九年八月雲州大守尼子右衞門督晴久は、「備後國三吉備後入道嫡男新兵衞は大内幕下にて、尼子方周防國へ相働く通路を妨げ、雲州勢兵粮及二難儀一。彼三吉を討隨へ軍勢の通路を可一開。」と、尼子下野守・同名刑部少輔・同式部大輔爲二先陣一五萬六千餘騎相隨へ、備後國比叡尾城へ押寄せ、府野山崎邊に陣取給ふ。三吉備後入道・同新兵衞以二小勢一遂二防戰一、數月相抱へ、大内家へ後詰を乞ひければ、幕下の國々へ有レ廻國一不レ移二時日一。備後國三吉が居城へ遂二後詰一。備中にて大内幕下侍大將一手に石川左衞門尉・細川備中守・高橋玄蕃・伊勢左京亮・小田小太郎・笠岡掃部・村上彈正都合六千、兵船三百艘、宮の浦、連島、笠岡の浦より漕出し、備後國鞆津に著レ船。一手は三村修理亮・二階堂近江守・野山宮内少輔・赤木藏人・上野民部・同伊豆・上田右衞門・穴田伊賀六千餘、備後東條雲州横田大坂峠に構二要害一。難所にて敵を待つ。南備中勢八月晦日に備後國山崎に著、城内へ案内を通じ相圖を待居ける處に、九月二日深更に城兵夜討に可レ出城内の貝に隨ひ、諸國の後詰勢も尼子晴久の旗本へ突掛り、以二合言葉一相働き深く切入り、淺く引取り、敵の首をば討捨て取間敷と相定め、丑の刻に尼子陣へ押寄せ鬨を作る。諸陣寢耳に是を聞き騷動仕ける處

へ、矢を射掛突掛りければ、尼子晴久は旗幕を打捨て落散けるを數多討捕ける。東條横田境目に待居ける備中勢、晴久の旗本へ切掛れば、尼子勢騷動して無レ道山峰へ登り、谷底へ雪崩れ落ち、我が太刀に貫かれ數輩失にける。尼子家の侍大將を數多討捕り、義隆卿御本陣へ送りければ、譽感の書二階堂近江守に給る。

尼子晴久安藝國へ發向の節、備中侍大將毛利元就へ加勢の事

天文十年七月、尼子晴久者、山陰道七箇國軍勢七萬餘騎相隨へ、藝州へ發向仕り、毛利元就居城吉田郡山城を取卷責戰ひ、從二大内義隆卿一加勢の大將深野平左衞門・宍戸左衞門尉・宮川甲斐守城内と相圖の任二鼓具一、城外よりも取卷相戰ふ。尼子勢度々軍には討負けれども、三軍の大將なればいつ可レ果軍と不レ見處に、備中國にて大内幕下の侍大將義隆卿へ以二飛脚一申上ぐるは、藝州郡山城へ致二後詰一毛利元就へ可レ致二合力一と伺ひければ、從二義隆卿一御返答に、尼子晴久以二大軍一其國を押通り候へば、銘々要害堅固に相守り、海道の難所に關番を居置き、雲州勢陣所へ兵粮不レ來樣に妨げ候へと、任仰石川左衞門尉・二階堂近江守・高橋玄蕃・上田右衞門・清水備後は穗田庄太夫居城猿掛山城石田要害へ楯籠り、關が鼻を切塞ぎ兵粮通路を留る。三村修理亮・赤木藏人・野山宮内少輔・秋庭大膳・鈴木孫右衞門は東條へ出張り、雲州横田村大坂峠要害にて兵粮の通路を押へ尼子勢の往來を留る。尼子晴久者藝州吉田庄にて數月の戰に失二勝利一退散、郡山城内の軍兵萬死を保ち喜悅の門を開きける。元就備中の侍大將へ有二厚禮一。

大内義隆尼子晴久を責事幷播州赤松備中へ出陣の事

大内家と尼子氏の近年は備後安藝兩國を論じ、當家を犯し掠め候。我も雲州へ相働き、積欝の旗を發せんと、毛利元就は杉原盛重・二階堂氏行を周防國山口へ被二召寄一、雲州へ出張の有二評議一。何れも御發向可レ宜と申し、出雲國以二繪圖一合戰場所を定め、勝負の損益を考へ、天文十二年三月四日、大内太宰大貳兵部卿義隆は、筑前・肥後・周防・長門・石見・安藝・備後・備中軍勢十二萬餘騎相隨へ、雲州富田城へ有二發向一。同國赤穴城主赤穴左京亮三千騎にて通路

の難所に控へて遂 防戰二備後備中の軍勢三村修理亮●二階堂近江守●伊達宮內少輔●赤木藏人●杉原播磨守●有地民部●楢崎十兵衞魁仕り相戰ひ、赤穴左京亮は居城へ逃籠る 軍神の血祭にせんと備後備中の軍勢城の四方を取包み、責口を定め相戰ふ。赤穴左京亮も弓矢馴れたる者なれば、四方に射手を配り石弓を刎ね防戰し、手負死亡多し。二階堂近江守一手へ首六十七討捕り義隆卿の備實檢。雲州陣一番首にて義隆卿譽感仕り給ふ。于レ茲播州白旗城主赤松晴政は、備中を責取らんと浦上宗景●宇喜多興家兩大將を備中へ相働き、雲州陣立の留守城々を責め隨へ候由有二注進一。二階堂氏行在城には、嫡男新左衞門尉●刑部卿經山城へ妻子親類八百餘楢籠り、一筋の道三箇所の難所に大木を切横たへて、所々に石を重置き、敵寄來らば押落さんと手配り、持口を定め相守る。小寺村要害に中島左京●同與助●同彦十郎●湯淺九郎兵衞●頓宮次郎惣●眞壁藤兵衞●橋本權七●那須與六●橋本市助●鷲見十兵衞●近藤新助●國府與三兵衞三十騎、農民三百人差添へ籠置き、三方の橋を引落し、城門必死と戶鎖指し、矢倉役所を相守る。從二將軍義晴公一晴政に急ぎ致二上洛一、細川次郎●三好長慶を致二退治一候樣にと就二御奉書一、赤松が軍勢刑部卿を引退く時二階堂新左衞門追慕ひ、赤松方の後殿岡本權之丞●浮田內藏●中吉平兵衞二十騎計り、諸上村畠道にて小返して相戰ひ、中吉平兵衞を二階堂新左衞門討捕る。清水備後は二十騎計にて王地原へ出張しければ、浦上右衞門太夫二三十騎にて指向ふ時、將棋備を用ゐ相戰ひ、清水が手より荒木下兵衞●片山助作●土師孫十郎●藤井與助突掛れば、浦上衞門大夫は赤松同勢へ掛入逃延びける。新左衞門先手へ軍使を立て、急ぎ引入れよ逃ぐるは敵に有レ術、追ふは非二武義一と制して、新左衞門居城へ引取る。籠城の軍兵萬死を出で一生を保つて、喜悅の門を開き謠 萬歲樂一。

毛利元就大內義長陶五郎退治の事

弘治元年十月、毛利右馬頭元就は逆臣大內義長●陶五郎隆房が楢籠りたる若山城取圍み責め給ふ節、備中侍大將三村修理亮●石川左衞門尉●二階堂近江守●上野伊豆守●清水備後守●細川兵部、都合一萬餘相隨へ、爲二加勢一石見國へ下着。元就卿●隆元卿掛二御目一候。是迄の下向令二感悅一乍レ去在國は赤松方●尼子勢●細川●三好の者共手遣の境目

に候故難二明置一候。急ぎ被二致二歸陣一堅固に被二相守一樣にと被レ申候に付、備中の諸士申すは、任一仰度候得共義興卿以來御厚恩難二芳謝一候。御吊合戰致二御供一逆臣殘黨へ矢筋射掛度存候。被二加二先陣一ば可レ爲二大望一候。在國の城々は手配り能申付、無二御覺束一儀無レ之段申候得者、宍戸善左衞門尉合備に被二仰付一、周防長門兩國の內若山城、松崎右田嶽の城、勝山城責、氷上繩手合戰に大內義長陶五郎隆房を討隨へ給ふ節、元就卿備中侍大將へ、此度の軍功無類の儀公儀へ可レ被レ達二上聞一と、銘々へ被レ行二戰功賞一、二階堂近江へ被二申渡一は、嫡男新左衞門尉當府可レ爲二在國一候間、豐田郡の內船木村・萩路村・眞良村・佛道寺村爲二飼領一令二扶持一候。向後彌忠節賴入と名馬を給はり令二歸國一候。一家の僕從迄戰功の賞に誇りける。

宇喜多和泉守備中へ働の事

永祿二年九月備前國沼城主浮田和泉守直家は、備中にて毛利元就卿幕下の城主九州へ陣立の窺二留守一、備前虎倉城主伊賀左衞門久隆を備中へ働の爲二大將一、竹庄吉川村中津井村近里を犯し掠め、亂取り苅田の働仕る故、爲レ押備中境目藤澤に築二砦一、中島加賀守爲二城主一、家臣中島世兵衞・同與助・野山淸右衞門・萩野源左衞門・小寺衞門・小倉四兵衞・中村掃部・高橋善七・福光九兵衞百五十騎、從二藝州一爲二加勢一、井上源右衞門・兒玉與七郎・轉藤右衞門百騎、都合千三百餘被二籠置一候。伊賀左衞門より河田又左衞門・守田帶刀・伊賀與次兵衞・片山彌左衞門籠置き度々有二迫合一。三村元祐・石川左衞門尉・中島加賀守・野山宮內少輔・鞍田の構を責けれども、片山彌左衞門・河田又左衞門・河原源左衞門・堅く守て防戰す。備中勢虎倉城爲二斥候一尾崎の木陰へ行きければ、虎倉勢山の險路森木陰に爲二伏勢一、三百騎、峯谷より擧二相圖之鬨一、鎧先擶へ突掛る。備中勢眞前に進みたる中島世兵衞・小寺衞門・井上源左衞門・兒玉與七郎討れ、三浦兵庫・小田小太郎手負ひ、雜兵七八十騎計討たれける。中島加賀守・渡部石見守・宍戸善左衞門、千五百餘騎懸合、伊賀方の勢百餘騎討捕りければ、殘兵山の尾の上へ引擧ぐる。伊賀左衞門も會川邊へ出張相戰ひ、城內より追々に突出で、うす谷・かわや谷にて相戰ふ。伊賀が家來片山與七郎・土井惣馬・河原四郎兵衞弓にて數多射落しける。

萩坂にて土井惣馬を中島彌兵衛討捕り、首、毛利元清へ差上る。中島加賀守一手、西の尾崎より鞍田城を乘捕り、城中へ火を放ちければ、伊賀方の軍勢虎倉城へ逃込みける。從二毛利家一上山兵庫・鳥越左兵衛・根矢與七郎に三百騎指添、爲二城番一被二籠置一近郷有二御仕置一。

毛利元就雲州へ働の事

永祿三年、備中侍大將石川左衛門尉・高橋玄蕃・伊勢左京亮・小田孫兵衛・細川兵部・中島加賀守、雲州赤穴に在城仕る節、小早川隆景は尼子方白鹿城へ働き給ふ節、先陣の兵士白鹿城蘭洞尾崎を請取り、晝夜穴道を掘り仕寄を付け切岸に着く。此城は山高くして峯より大石を落し掛け矢を射掛る事如二雨之降一、難レ登嶮山なれども、責むるに勝る無二難所一守に越えたる無二平易一。此城尋常の術にては難レ登とて、金掘數百人に左右三間の穴道を掘らせける。城内よりも横穴掘つて可二働出一と、内外より掘掛け途中にて鑓を合せ、城兵難レ防、中島加賀守先陣にて二の郭を乘取り、城主松田藏人助を生捕る。則陸奥守元就卿へ達しければ、仁義の弓を曳く者は非レ可レ殺とて、松田藏人助一族八十三人、洗合崎より船に乘合せ隱岐國へ被レ送ける。義久白鹿城被二攻落一不レ安思ひ、今は以二一戰一馬潟原へ出張り有無の可レ遂二合戰一と毛利元就卿へ軍使を立つる。元就卿は、敵來て軍を好に非二違變一と、八幡山星上より人數を繰下し、備を定め、左備吉川駿河守・河野兵部少輔・宍戸善左衛門・熊谷伊豆守・兒島三郎右衛門尉・宇津宮遠江守・楢崎三河守・木原兵部・杉森出羽守、右備小早川左衛門佐・毛利治部大夫・宍戸安藝守・吉見大藏大輔・益田全辨入道・内藤下野守・三村修理亮・石川左衛門尉・中島加賀守・細川兵部都合三萬三千餘騎を三分し、備二二十四組、洗合崎城より押出し馬潟原を見れば、尼子義久・倫久今日を限りと討出で、左備山中鹿之助・三澤兵部少輔・熊谷兵庫助・村井越中守・三刀屋藏人助・日野孫左衛門・池田宗六郎・同藤兵衛尉・加藤彦四郎、右備龜井新十郎・立原源太兵衛尉・同備前守・本多豐前守・津森宇兵衛尉・秋宅庵助・馬木彦右衛門尉・川添美作守・宇山善四郎・森脇市正、二陣に分て先鋒矢を列レ伍、後陣は乙矢に備へ討出たり。毛利元就卿は鶴翼に備へ、虎韜を開き請て得レ窺二其虛隙一可二必已一と可レ有折、

*一品は毛利家の紋章、四目結は尼子氏の紋章、尼子氏は宇多源氏佐々木の出なり故に四目結を用ふ。

*清和之苗裔とあるは誤なるべし。尼子氏は宇多源氏なり。

時も未下刻合戰始まる。累年の違恨以二此一戰一可レ決と、鬨を三度作り皺具七五三と調合、一品の赤旗と、四目結の白旗入亂合ひ、七度迄相戰ひ揉合ける時、尼子方の侍大將馬木彦石衞門・川添美作守三百騎計、小早川の魁楢崎三河守・長大藏左衞門備へ突掛り、隆景先陣三町迄引退く時、備中國住人三村修理亮・石川左衞門尉・中島加賀守・清水備後守一手に成、横鑓に突掛り入亂れ相戰ひ追崩し、備中勢首二百六十七討捕り、同所野畔に暫く休み、兵粮を遣ふを見掛け、立原源太兵衞・牛尾信濃守・秋宅庵助一手に成り突掛る。三村・石川・中島・清水相掛り戰ふ。此時隆景の旗本大返して相戰ひ、尼子勢を追崩し散亂仕ける。尼子の勇士山中鹿之助二百騎計相隨へ戰場を不レ退、追來る敵を四度追返し、自分も首五つ計捕り、芝居を不レ去敗軍の身方を集め、八幡山へ靜々引上る。大强の侍大將と稱美しけり。

尼子義久毛利家へ降參の事

大江元就卿は、島根郡洗崎城へ吉川駿河守・吉見大藏大輔率二一萬五千騎一、伊藤府倉山に在城仕り、敵の粮道を斷つ、宍戸安藝守・杉原播磨守は美保關に在城、丹後但馬の船を斷つ。諸城兵粮及二難儀一、城守明退き富田城に窮りける。藝州勢近城を持堅めければ、尼子譜代の軍勢落散り、今は可レ遂二防戰一術盡き、山中鹿之助・立原源太兵衞其外老中差集り、如レ此鉾折れ矢種盡き候へば、毛利家へ御降參御坐し衆命を助け、近き愁を免れ遠き謀を廻し有二後戰一は、素懷の旗を御發可レ有と諫めければ、義久兩眼に浮レ涙、毛利の幕下に降り家僕と成つて天下の指笑に落ん事可二口惜一、腹を切て清和之苗裔子孫之面を可レ清と宣へば、山中鹿之助泪を鎧の袖に受け、御思慮義に有り候得共、正を變じて奇と成す事兵家の慣、難に當て詭道を用ふるは覇者の術也。世俗の諺に淋を嘗ても遂二本意一よと言へり。義久卿一旦の恥辱を凌ぎ給はゞ、幸盛命の内に義兵を發し當家を興隆可レ仕と申上れば、義久諫得して、痛敷哉尼子義久は剃髪染衣の姿に成り、天山瑞閑と法名付け、益田玄蕃頭・吉見大藏太夫陣門へ被レ出、則元就卿へ達しければ、洗合崎へ送り陸奥守有二對面一。慇懃に饗喰、上坐に詰二珍膳一、献レ盃良久。元就卿は義久平伏の體を見給ひ泪を促し、弓箭取身の慣とは乍レ云、昨日迄山陰道七州の大守、懸分野痛敷存候。我仁義の弓箭を心掛くる故降敵を不レ殺、剃髪の姿に

成給へば、一入慈義深く存候。在國へ下り給へ、一歩の地を可二進置一と宜ひ藝州へ被レ送ける。今日は山陰の雲に立別れ、玉粧金鋪の臺を捨て、身を漂泊の旅に寄せ、女姓少人々もうかれ出給ふ哀れさ。北の方硯を乞ひ筆を染め狂歌を一首を被レ詠。

行末は郷の川霧せき留て何三好野の道や開けん

と詠み泪を袂に請けて臥し給ふ。義久入道瑞閑大に怒つて、武士は盛者必衰安危興亡の身なれば、不レ限二吾獨一、身を捨て名を惜むを道とす。斯る憂目に逢ふ事も、妻や子供の故いやしと筆を取る、

三好川霧閉込る瀬々に來て世を渡らんと名をは流しつ

と被レ詠。天野中務大夫輔三百餘騎を召連れ路次の警固承り、霜月七日に安藝國吉田郷へ參著仕りければ、饗喰様々にて猿樂能興し、同九日同國長田庄延命寺に被レ移、内藤下野守・桂五郎爲二守警一遂一馳走一。尼子義久入道も今は身の富樂に心解け、累年の遺恨己が罪に被レ歸ける。大江羽林元就卿山陰道八箇國を討治し、累年雲州在番諸大將軍功の武士粉骨の軍勢へ、饗喰様々の上にて猿樂能興し、戰勞を可レ休と中丸へ御下り、左棧敷吉駿河守元春・河野兵部少輔・宇津宮遠江守・吉見大藏大輔・益田全辨入道・同玄番・大庭加賀・佐波常陸助・福原出羽守・粟屋右京太夫・福岡彦右衛門尉、右棧敷小早川左衛門佐隆景・毛利治部大夫元清・宍戸安藝守・同備前守・上原右衛門太夫・口羽下野守・小笠原彈正小弼・桂左衛門・三村修理亮・石川左衛門尉・中島加賀守・同新左衛門尉・清水備後守・同長左衛門尉・細川兵部・伊勢左京助・小田孫兵衛太刀佩跪き、式三番終て食籠名酒佳肴種々珍菓を給つて、鳥目三千疋猿樂に給はり、感能耳目を清うす、能七番終て饗喰様々の上にて、軍功の賞を被レ行數々の名物を被レ下。中島加賀守へ此度山陰道靜謐速に成功を立つる事、各累年無二二心一尼子方諸城被レ押。軍功無二比類一故也。嫡男左衛門當國可二殘置一爲二飼領一仁多郡竹崎村・坂根村・原田村・加恩に被レ下候。向後彌忠義を心懸可レ給と從二元就卿一感狀を中島加賀守に被レ下。

備中待大將備前龍口城へ籠城の事

永祿四年五月、備前國御野郡平瀨村の船山砦へ、備中國服部郷主禰屋七郎兵衛一手の内、須々木豐前・鳥越若狭・佐野因幡を爲二番大將一被二籠置一。備前國主浦上宗景は沼城へ出張、浮田が一手最庄治部・有松治郎左衛門・青江次右衛門・宍甘四郎左衛門・中島平藏加勢に被二籠一、近日此要害へ取掛申風聞御座候。加勢を被レ下候樣にと申越候趣、三村修理亮・石川左衛門尉へ申達しければ、宗景『家老の者共、不禮の言下に手を束ね罷有る事心外也。此度有無の可レ遂二合戰一。』と、備中一身中へ有二廻文一。然る處に最庄治部申越すは、年來背二本意一候段御赦免被レ爲レ成候はゞ、自今御身方可レ仕候間、近日御人數被レ下候はゞ、殘る物頭共を當城へ楯出し、御人數を正八幡丸へ可二引入一と中島加賀守へ密通仕る。返答に誓紙調べ、*兄弟仲成共人質に指越候はゞ可二取持一と申遣候得ば、弟坊主魔谷院に誓紙を持せ爲二人質一差越候故、右の趣石川久智へ遂二内談一、人質をば酒津城主高橋右馬允に被二預置一、龍口城へ爲二加勢一最庄治部へ取懸る日時相圖を定遣し、加勢大將禰屋與七郎・樂師寺彌五郎百五十騎召連れ籠城仕、最庄治部へ令二合力一候。矢津要害寢木屋へ備前勢を楯出し、備中勢八幡を相守る。最庄治部禰屋與七郎へ申は、御身方に隨身仕る上は、近郷御手に入候樣に心懸候。國留・澤田の要害へ御働被レ成候はゞ、御案内可レ仕由申候へば、志賴母敷候。當城を堅固に相抱、此後近郷へ働の案内可二賴入一由申、當所嶮岨の山城に脫道可レ有レ之。案内あれと申節、高橋右馬允に預置く人質魔谷院、缺落仕るとの飛脚從二備中一到來の趣、身方の物頭へ密通仕、梶屋八兵衛に術を含め城外巡見に出る。搦手は川瀧岩石峙ち、正八幡丸巖石峨々として鳥の通も絶えたり。不レ能レ防レ勢、南方に大山横たへ、後詰の敵勢峯に備へたり。四の御神要害に宍甘太郎右衛門・角南隼人楯籠る。龍口西の出崎丸にて、梶屋八兵衛に手指候へば、最庄と引組瀧へ落入、郎黨金萬彌助禰屋に切て懸る。與七郎大太刀の達者なれば、彌助を川へ切落し持口の丸へ立歸、所々矢倉役所に手配仕る。其最庄丸へ使を立て、治部殿金萬彌助自分の郎黨梶屋八兵衛は城外搦手へ見廻り、巖石訛落給ふ見屆候へと申遣しければ、治部が一手有松次郎左衛門・金萬又次郎・祇園忠左衛門・同與九郎・青江次右衛門・國富源左衛門・同長光尋來る内に、二の丸へ備中勢手賦仕、最庄が一手へ申は、治郎殿仕合、兩家の郎黨不レ及二是非一働也。殘る旁藝州方へ無二別心一可レ被抽二忠儀一由、誓紙を被二調給一別儀有間敷と申聞、船山城守鈴木豐前・鳥越若狭・佐

*兄弟の内なり共の意か。

*生石中務重復本のまゝ。

野因幡より、龍口麓へ須々木四郎兵衛其外郎黨を舟に乘せ、城の麓へ指下し死骸を取上げ見れば、最庄治部●金萬彌助命不レ絶を指殺し、梶屋八兵衛●牧野次郎兵衛を備中へ返し、暫時の計略にて龍口城主を討捕こと近國に無レ隱。浦上宗景は鬱憤不レ淺、重て備前美作軍勢六千を相隨へ、五月二日に龍口近邊へ押寄せ、峯に構陣城對陣す。城兵矢倉狹間に防兵を配り雁行の陣を用て、備前勢に矢倉要害を守らせ、龍口へは備中軍兵を手配仕り相守る。敵勢は湯廻村四之御神村谷合より、二騎三騎宛忍寄り矢を攻ち高名す。城中より石を刎落しければ、敵方に死亡手負日々あれども城内には無二越度一。去れ共敵方より遠発仕り兵粮の絶、通路、今十日の下行あれば備中へ加勢を乞ひける。後詰爲二大將一石川左衛門尉●中島加賀守●上野近江守●高橋右馬允●清水備後守●生石中務●日幡六郎兵衛●*生石中務四千餘、御野郡妙現宮山迄押著、芦高川を打渡り脇田村へ駈上る。石川左衛門尉●上野近江守●清水備後守備五千餘は祇園村へ駈上る。船山城守鳥越若狹●佐野因幡二百餘、中原河原を打渡り、段之原南の尾崎へ取上る。石川左衛門尉●中島加賀守。田道を四之御神村へ押著、山の麓より二備龍口城守禰屋與七郎三百餘騎一手に成り、矢津谷へ出張闘を揚る。石川久智●中島輝行備同音に闘を合せ、要害へ責懸る。岡平内●同權右衛門●宍甘四郎左衛門●同太郎兵衛要害より突て出、坂中にて迫合敵を數多討捕り身方も討れ、追ひつ返しつ相戰ふ節、山の岡より花房彌左衛門●岡平内横鎚に突懸る。備中勢危き處に、禰屋與七郎●俵野因幡峯より見及、眞下りに突懸り、花房彌左衛門跡備後を突崩し、數多討取り山峯へ駈上る處を、岡平内●同權右衛門踏留り相戰ふ節、禰屋が二男同彦右衛門●同孫市郎●鳥越左兵衛三十騎計要害へ乘込、木屋に火を付くる故、岡平内●同權右衛門●宍甘四郎左衛門●同太郎兵衛三掉山へ引退き、海邊へ落行く。石川久智●高橋行友●中島輝行は擧二勝闘一、銘々の旗を燒跡に押立、身方の軍勢を集むる。禰屋與七郎龍口城へ引入を、岡平内●宍甘太郎郎兵衛●角南集人慕ひ付入にす。禰屋弱々と應答ければ、敵競懸る、時に與七郎小返して相戰ふ。岡將監●平井庄七●中吉與兵次●宍甘與左衛門●青江次右衛門五十騎計討捕、其身も薄手を負ひ、龍口城へ引籠り、城内普請して兵粮を取籠め、搦手堅く申付備中へ歸陣仕る。龍口籠城の軍勢萬死を出て一生を保ち、喜悦の門を開きける。此時從二藝州一中島加賀守へ譽感の御書被二下ける。

備前野田大炊助備中侍大將へ計略の事

備前國御野郡野田城主野田大炊助は、從二浦上遠江守一蒙レ疑在國難レ叶由にて、備中國服部郷へ退來り彌戸七郎兵衞尉を賴、當國を被レ免候はゞ、備前へ御働の節加二御先陣一忠節可レ仕由申に付、石川左衞門尉へ相達候へば、上野近江守に被レ預山田村に住所有レ之。備前國津高郡賀茂虎倉城主伊賀左衞門久隆老中河原六郎右衞門は、野山宮内少輔へ申通じけるは、伊賀左衞門小人の讒口を用ひ仁義暗く、某に疑を掛候。備中に在國相叶候樣に賴入候由申通に付、石川左衞門尉へ相達候へば、對二當家一疎意無レ之趣誓紙を申付、下道郡秦村に住所被レ免、川面三郎左衞門に被二預置一。武略の心懸深き剛者也。

備前龍口城へ備中侍大將加勢附討死の事

永祿七年七月十二日、備中國加陽郡服部郷主彌屋七郎兵衞嫡男與七郎は、藥師寺彌五郎・土屋四郎左衞門・鳥越若狹・生石藤四郎千二百餘を相隨へ、備前龍口城相守る節、近郷遠里へ相働き、麥を薙ぎ、植田を覆しければ、澤田城守岡將監・中村次郎太夫・寺尾久五も龍口へ相隨ひ、近城へ相働候節者、先陣を承る。浦上宗景爲二下知一浮田和泉守直家・同與太郎・明石源三郎・岡平内・長船又右衞門・花房又左衞門・高畠市正・中吉與三兵衞・戸川平右衞門・江原兵庫・備前美作の軍勢以二一萬餘騎一、馬屋村・牟佐村・宍甘村・土田村・尾町村・八幡村・河原村取卷き、龍口城内へ兵粮の絶二通路一、四之御神村・湯廻村山より攻寄する。龍口城、三方嶮岨にして、段の原より矢津谷の峠に構レ砦、龍口より相守る。敵急ぎ攻むるの術絶えけれども、城内の兵粮今十日を限りければ、備中へ加勢を乞ふ。三村修理進・石川左衞門尉・上野近江守・穗田庄太夫・中島加賀守・小田小太郎・細川兵部大夫・野山宮内少輔・高橋玄蕃・伊勢兵庫、同國高松城へ會合し、軍勢を配分して勝負の損益を評定す。一手は三村修理進・野山宮内少輔・赤木藏人・石蟹(イシガ)衞門七千餘を相隨へ、大井河原にて馬揃仕り、鳴谷川より菅野村・横井村・東原村より笠井谷へ出張り、一手は石川左衞門尉・上野

近江守・中島加賀守・清水備後守・上山兵庫・生石中務・日幡六郎兵衛八千餘を隨へ、辛川村より今岡村・山崎村・猶津村・高部村河原にて備を定め、諸方の相圖を待ち、一手は穗田庄大夫・細川兵部大輔・伊勢兵庫・小田孫兵衛・村上彈正・笠岡掃部七千餘を相隨へ、花尻村・尾上村・白石村・今村より春日宮社內に備を立て、芦高川を打渡る兵もあり。小船に打乘り三掉山へ取上り、身方の相圖を待居ける。石川左衛門尉手より爲二斥候一江口源助・友野彌右衛門申越敵方に無レ術、川に水も無レ之候間、御急ぎ候へと有二軍使一。中島加賀守備の斥候湯淺新藏・國府惣右衛門申は、津島七衛門は、要害に多勢籠城、林の木陰に伏兵も有レ之と見及候。夜明備を繰出し可レ然由申時、三方の身方相圖の狼烟を上る。福輪寺要害に籠め置ける野田大炊助・生石中務は、身方の働に不レ構無二油斷一相押と申付、先陣禰屋七郎兵衛・土師平十郎・鈴木孫右衛門・妙見宮山へ押登り、一手の銘々御野村・北方村・中村より川を渡さんと待居ける。中島加賀守・上野近江守・清水備後守は、富山岡山兩城を氣遣ひ、井福村日燒鼻を押行く節、三村修理進家親一手は平瀨村に出張、穗田庄大夫一手は芦高川を打渡り、瓶井山三掉山の峰にて擧二鞁具一、石川左衛門尉旗本妙善寺砦を行過ぐる節、押への大將野田大炊助・津島七右衛門・山崎孫之丞兵不レ殘一手に成、石川久智旗本へ切懸り相戰、福島羽武之山尾崎へ敵兵立並び弓射懸る。笹瀨山城兵今田右門・同清次郎・金光文左衛門・横井牛之助・石川久智の跡備へ突懸り、前後の敵と相戰ふ節、石川久智妻手野田大炊助乘寄せ脇坪を突通す。久智も拔合せ野田が小鬢を切下る時、中島新左衛門野田を鎧付、湯淺新藏首を取る。中島加賀守より禰屋七郎兵衛方へ軍使を立、福輪寺押への身方に謀在の久智を討捕候間、跡備へ御心被レ添候へと軍使あれば、得二其意一一手を繰引にする。祇園忠兵衛・青江庄左衛門・津島孫兵衛・金萬又次郎・有松次郎左衛門、山の尾崎松の木陰に立並射ける。備中勢的に成て備四度路に成騷動す。中島新左衛門相備は此時也。我が再拜に相働候へと、殘兵を前後に立相戰ひ、備前勢を八十餘討捕る。禰屋七郎兵衛は、敵陣より雨の降るごとく射けれども繰引にす。敵の射懸る矢に當り、數人被レ討。七郎兵衛內甲被二射通一馬より落、相果る。弟禰屋孫市郎一手を相隨へ、今田右門備へ突懸り四十六人討捕る。備前勢は羽武山の峯の要害へ引籠る。中島新左衛門父子の備一手にして橫鎧に突懸り、祇園十兵衛・津島孫兵衛・青江庄左衛門を初め、十餘討捕り相引にす。中

※妙喜寺合戰記芦高川を芥川に作る乱か是なるを知らず。又此川今の朝日川を指せること疑なし。

※三村修理進家親とあるは修理亮元親の誤なり。

※德田庄大夫は元親の弟にして、妙善寺合戰記庄元祐と同人なり。

島輝行は三十騎計相隨へ、河邊村堤にて休足し兵粮を遣ふ時、長船又左衞門・糠田與次兵衞・弓削平兵衞・中吉與兵衞進み來り相戰、敵二百騎計に被二取籠一數刻相戰、加賀守は敵二人討捕り、中吉與兵衞と駈合引組、老武者なれば被討時、郎黨中島與助・同彦十郎・近藤新九郎突懸り、中吉與兵衞を石井新左右衞門討留、輝行の首を取返し、隨兵も枕を並べ討死す。嫡男中島新左衞門三十騎計を相隨、津島村山の岨に身方を集居ける處に、父加賀守被二討ける由告來る。同所にて討死せんと、今田右門河本對馬備へ駈込、數刻相戰ひ、首十三討取り身方を見れば殘兵十四五騎被二討、殘る郎黨を相隨へ又敵陣へ駈込む節、國府興三右衞門・吉留重右衞門馬の口を控へ、後戰の種に或給へと、是非猶津村へ引退き、山の峰に龜甲に二引兩の旗を押立、一日一夜隨兵を集むる。清水六郎兵衞も所々より馳來り二百騎計に成り、中島加賀守死骸を取持せ備中へ引退き、加陽郡刑部郷小寺村於二報恩寺一佛事作善を執行、一堆青塚の主となす。法名は相談院前賀州大守見外宗悟大居士。此時藝州より御使者到來、中島新左衞門戰功を被二擧數箇所恩賞を給り、號二中島大炊助元行一。

再龍口城へ加勢小田小太郎討死の事

龍口城後詰石川久智・中島輝行・禰屋輝秀は、野田大炊助術に乘り討死、雜兵七千餘被レ討。彼の戰場を浮田直家千騎谷と名付る。禰屋與七郎・藥師寺彌五郎相圖相違して、敵の軍勢二三の丸迄責入る。城内より矢を射出し石を刎落し遂二防戰一、敵方に手負死亡多けれども城兵に無二越度一。去れども城兵の兵粮少く、今二日の下行あれば備前へ密使を越し、龍口を取卷き敵の備へ切懸り給はゞ、城中よりも同事に突て出相戰ふ中に、兵粮を取込か、城に火を懸切退か可レ仕由告來る。八月九日、三村修理進元親・野山宮内少輔・赤木藏人一手は、穗田庄大夫・細川兵部勝久・伊勢兵庫・小田小太郎・高橋勝馬允一手に成り、瓶井山澤田より忍寄る。一手は中原河原を押渡り、九日丑の刻に狼烟を上る。城内より相圖合せ、段の原峠を窺見る處に、岡平内・花房彌左衞門・弓削平兵衞・宍甘太郎兵衞・陣屋に火を付切て入る。諸陣寢耳に是を聞驚き、物具よ太刀よ馬よと騷動す。城兵は駈入駈拔交り合、彼處に顯れ、是處に隱れ、火を

散して戰ける。折節暗き夜なれば、敵身方分兼たり。此時、三村家親・野山宮內少輔、脇田村へ横鎧突懸る。細川兵部・小田小太郎は、四之御神村の敵に切て懸り相戰ひ、備中勢三方同時事に突懸れば、宍甘村海面村へ備中勢は引退く。小田小太郎は角南集人に內甲を被ㇾ突ける時、弓削太郎右衞門首を捕る。暗き夜なれば、小田討れるも身方は不ㇾ知。敵兵飽浦三郎兵衞・和氣次郎兵衞・弓削太郎右衞門・宇柿太郎兵衞其外百二十餘備中方へ討捕らる。此騷動に龍口城內へ兵粮を取込、上山兵庫・日幡八郎左衞門加勢に籠め、船山要害へ須々木四郎兵衞・鳥越若狹・佐野因幡を籠置き、殘兵は備中の在所々々へ歸家す。

宇喜多和泉守備中より働の侍死骸を送る事

同十一日浮田和泉守より、備中國幸山城主石川源左衞門久式へ有ニ使僧一。今度は國人不意に及ニ合戰一隔ニ胡越一を なし非ニ本意一候。龍口城邊福輪寺にて討死之死骸送進候。雜兵之死骸福輪寺山に葬禮仕由を申越す。石川久式、御懇情の段令ニ感入一由有ニ返答一。脇田村にて討死の小田太郎死骸は、郎黨名越修理・有岡右京來り、福輪寺山の峯に葬禮を仕墓所を築き一堆の印塔立置、討死の兵四百二十九人、同所の峰に三つの塚に取收め、福輪寺の首塚と申習はし候。戰場は津島村千騎谷と、浮田直家より申傳候。浦上宗景大悅の由、備中の諸士備前の郡主へ絶ニ通路一ければ、討死の子孫二月七月八月彼岸に、以ニ代僧一墓所へ火を燈し水を回向す。浮田和泉守毛利家隨ニ墓下一給ひし後、直家より鄕民に申付墓所に石塔を立、七月十三四日に脇田村湯廻村四之御神村の峰々に數萬の火を燈し、討死の子孫士農工商舊功の恩を思出し、酒菓を備へ供養す。一戰の双に滅し主從、成佛得脫の蓮臺に至らざらんや。難有事共也。浮田直家被ㇾ申は、敵と成り身方と成るも、前因後果の報也。仇も善にて報ずるは義士道と宣ふ。古士の曰、直家は計略の得ㇾ謀、毛利家の威を借り、家を可ㇾ發仁とさゝやきける。

中國兵亂記一終